

2014年度 博士学位論文審査報告書

No. 1

提出期限：口頭審査 2015 年 2 月 21 日(土) 後 3 日以内厳守

日本言語文化専攻	氏名	久村 希望	学生 番号	G12211
論文題目	異郷観の変遷と定着 — 目連救母説話における地獄観を中心として —			
審査概要及び評価（2000字） <u>主査が記入</u> （ワープロで清書してください。）				
<p>本論考は、推古朝以前に日本に伝来したとされる『仏説盂蘭盆経』を受けて成立、発展していった「目連救母説話」の変遷を跡付けるとともに、それぞれの文献における特質を明らかにしようと試みたものである。</p> <p>まず第1章では、日本の文献で最初に目連救母説話の内容を確認できるものとされる永観2（984）年成立の仏教説話集『三宝絵』にはじまり、『好注選』、『宝物集』、『餓鬼草紙』、『私聚百因縁集』、『曾我物語』、『三国伝記』、御伽草子『もくれんのさうし』、説経『目蓮記』、『目連尊者地獄巡り』等にいたるまでの変遷を述べていった。また、その第2節では、目連と龍宮との関わりに注目し、『私聚百因縁集』、『三国伝記』では「目連救母の前後に難陀・跋難陀龍王の逸話を加えることにより目連と釈迦との関わり、また目連が神通第一の人物であったことが目的である」と意味づけている。</p> <p>この章は、とりわけ新しい見解が示されたわけではないが、それぞれの文献の跡付けは実に丁寧に行われており、また龍宮との関わりに注目した点は幾分かユニークな着眼であると評価できる。</p> <p>続く第2章では、目連救母説話の物語としての中心を、目連が母を救済することにあるとする観点から、地獄、餓鬼を考察の対象とし、また表現上の変遷を延べていった。</p> <p>論者は、目連救母説話は、鎌倉期までは『仏説盂蘭盆経』の内容をほぼそのまま伝えていたものが、そこに日本独自の異郷観を取り入れ、新たに中国から渡来した『仏説目連救母経』の地獄巡りの影響を受けて変遷していったとし、その理由を死後の世界に対する意識の変化と、仏教説話から、より物語的なものに発展していったことに求めている。</p> <p>この章で注目すべきは、『仏説盂蘭盆経』を一連の目連救母説話の重大な転換点に位置づけたことにあるが、そのことの意義をさらに追求して論及すれば、より説得力を持った論考となったであろう。</p> <p>第3章では、地獄、冥途観の諸相を『日本霊異記』以下の文献を対象に考察していった。</p> <p>日本で最初の仏教説話集とされる『日本霊異記』の他界観を考察するにあたり、まずは上代の『古事記』における「黄泉」との関連を考察し、それと仏教的地獄の違いと『日本霊異記』における特質を明らかにしていった。また、以下には地獄、</p>				

冥途観の諸相を考察していったが、これは次の章で目連救母説話の地獄巡りを考察するためであったと思われる。そして、『往生要集』、及び『今昔物語集』に見られる地獄観を考察していったが、この章は本人にとっての必要性はともかく、「目連救母説話」の研究としては、やや補足説明的であり、むしろ次の章で補注的に扱った方がより適切であったと思われる。

最後の第4章では、目連救母説話における地獄巡りに焦点をあてて論が展開されている。そして、そこではまず『仏説目連救母經』の伝来前後に大きな変容があるとし、特に御伽草子『もくれんのさうし』以降は、冥途巡りや閻魔王の存在が欠かせない要素となったとする。

また、結論部では、「目連救母説話」には、『仏説目連救母經』の伝来前後に大きな変容があるとし、特に御伽草子『もくれんのさうし』以降は、冥途巡りや閻魔王の存在が欠かせない要素となったとする。そして、そのことの背景には「十王經」流布による影響があったと指摘している。




この章では『目連のさうし』、『目蓮記』、『目連尊者地獄巡り』をとりあげて、これらの作品における、地獄巡りの意味づけを試みたのであるが、それぞれの表現上の特質はともかく、作品としての意味づけという点においては、残念ながら必ずしも十分に論が展開されたとはいえないのは残念である。

以上、久村論文は、さまざまな文献に見られる「目連救母説話」を対象とし、その歴史的変遷過程を跡付けようとした試みである。

先行の研究を踏まえながら、個々の文献を読み解き、それぞれの時代における特質を押さえていった点は評価に値する。また、それらの説話群の背景にある地獄観を確認していったことも、これらの作品の思想的背景を探る上で有効であったと思われる。

ただ、作品が語る表現内容の把握の上に立って、さらにこれらの作品個々の、そして、またそれと同時に「目連救母説話」が全体として持つことの意味づけ、あるいは文芸としての意義の論及という点では、やや弱い点も残る。

総合的に見るならば、今後さらに研究を進めていく端緒に立つ研究成果として、本論考「異郷観の変遷と定着一目連救母説話における地獄観を中心として一」は、博士（文学）の学位に値するものと判断される。

口述 審査	合格 ・ 不合格		
主査	金田 文雄 教授 		
副査	柚木靖史 教授 	副査 佐藤 茂樹 教授 	副査 脇谷 英勝 教授 